

巨大地震と邪馬台国論争

中邑徹

21世紀の今、世界各地で未知であった遺跡が次々に発見されている。古代の自然異変に伴う社会の栄枯盛衰の史実も明らかになり始めている。出土資料を限なく記録して精度の高い分析を可能にする新しい技術や学際研究が広がってきたからである。最近の地質学調査によれば、今から2000年前頃、史上最大規模の南海トラフ地震と津波が日本列島で発生していた。被災地では無数の人命や施設が失われ、社会が混乱して食住資源の確保をめぐる争いや流民や移民が増え続けていたに違いない。しかし古代日本社会の謎をめぐる邪馬台国論争にはこの自然異変について論考したものは皆無に等しい。

日本列島と同様、エーゲ海を臨むギリシャやアナトリア半島は複数の地球プレート（地殻）が重なる地帯であるため、古代から大地震と津波が発生してきた。今から3600年前頃、エーゲ海で未曾有の巨大地震と津波が発生した。本稿はその自然異変とその後の古代ギリシャの社会変遷に基づいて邪馬台国論争の盲点を考えた試論である。当時の古代ギリシャ社会の史実については、別途、拙著「地震とミノア文明」で綴った。

巨大地震と津波の発生時期、奴国と邪馬台国

2009年、地質学者の岡村眞と調査団は四国高知県土佐市の蟹ヶ池で津波が形成した半メートル前後の地層を発見した。推定年代の誤差は数十年とされているが、その後の地層調査によって今から2000年前頃に史上最大規模の南海トラフ地震・津波が発生していたことが明らかになった。地震の規模はマグニチュード9以上、津波の高さは最大65メートル前後であったと推測されている。2011年の東日本大震災で発生した津波は最大38メートル前後であったことを考慮すると、それはエーゲ海のテラ島（サントリー二）のカルデラ噴火前後にエーゲ海群島社会を襲った津波に近いものであった。四国（高知県と徳島県）、九州（宮崎県と大分県）や紀伊半島（和歌山県）の太平洋沿岸地帯における被災地の惨状は計り知れないものであったことは明らかである。

未曾有の南海トラフ地震・津波が発生する前、太平洋側の平野部では水田稲作農業が普及していた。そのため、農具・工具も不可欠になって多くの集落社会では人口も増えて都市化が進み、交易も広がっていた。3世紀末頃に編纂された「三国志」の魏志倭人伝によれば、古代日本社会は小国分立社会で小国の数は百余り存在していた。しかし3世紀末には何らかの理由でその数には1/3以下になっていた。

5世紀に編纂された古代中国史書「後漢書」の東夷傳によれば、紀元57年、九州に拠点のあった奴国（倭奴国）王の使人が貢物を奉じて後漢の光武帝に朝賀し、印綬を授けられていた。大陸の古代帝国と外交関係を築いた奴国は中国と朝鮮半島の古代社会との交易が広がり、繁栄していた。奴国は当時の小国分立の日本社会の中でも最も政治勢力のある王国社会であったの

だ。しかし東夷傳によれば、その57年から半世紀後の107年、小国群の盟主であったと考えられる倭国王帥升らが後漢の安帝に生口（奴隸）百六十人を献上し、朝見を請い願っていた。これは、当時、古代日本社会と後漢との外交関係が奴国王から倭国連合の王帥升に移行していたことを示唆するものだ。献上したその生口が奴国民であったとすれば、奴国王は57年から107年の半世紀の間に王権を失っていたと推論することができる。当時、倭国間で覇権争いがあったことが考えられるが、その争いも史上最大の南海トラフ地震・津波がもたらしていた社会混乱と無関係であったとは考えられない。

2世紀の後半には鉄武器が古代日本社会の各地に普及し、小国分立社会の再編成がいつそう進んで熾烈な争いが70～80年間にわたって広がり続けていた。魏志倭人伝によれば、長期にわたるこの「倭国の大乱」時代を経て多くの古代日本社会は卑弥呼を女王とする邪馬台国が統治し始めていた。また、魏志倭人伝が編纂された当時の古代日本社会の王国は邪馬台国、伊都国と狗奴国の3国だけであった。この記述からも奴国の政治経済勢力はすでに衰えて国王不在の社会になっていたことが分かる。

1～2世紀の古代日本社会では壊滅的な南海トラフ地震・津波に続く社会混乱や争いが続いたが、3世紀になって倭国群盟主国の邪馬台国の台頭によって統治され始められた。一方、エーゲ海群島社会ミノアはミノス王朝の下で交易で繁栄していたが、今から3600年前頃、クレタ島北方のテラ島のカルデラ噴火に伴った巨大地震と津波に襲われた。無数の犠牲者に加え、港や都市施設を失って経済基盤が弱体化したため、流民や移民も増え続けた。その自然大異変の発生からおよそ150年後、ミノス王朝の本拠地があったクレタ島はギリシャ本土にあったミケーネ王国に侵入され、ミノス王朝は名実ともに崩壊した。エーゲ海群島社会は、その後、およそ3百年間にわたってミケーネ王国に統治されていた。



(エーゲ海に浮かぶクレタ島: Rand McNally)

邪馬台国台頭と奴国分国について

福岡県の遺跡には奴国王を埋葬したと思える墓のある須玖岡本遺跡がある。その墓の棺中には中国製の銅鏡等が埋葬されていた。2016年には今から2千2百年前頃の奴国の有力者のも

のと考えられる墓も出土している。同遺跡では青銅器やガラス製品、また、鉄器も多数出土した。須玖岡本遺跡は紀元前後に未曾有の南海トラフ地震と津波が発生する前の遺跡である。須玖岡本遺跡の周辺地域は古代エジプトとの交易で繁栄していたミノア社会の中心地であったクレタ島のような地域であったのだ。しかし魏志倭人伝によれば、3世紀末の時代には奴国には王はなく、国の総住戸数も2万戸程度の倭国になっていた。また、その頃、総住戸数5万の王国伊都国が邪馬台国の政務を執って中国や朝鮮半島社会と交易していた。この社会変遷と邪馬台国の存在は巨大地震と津波で衰退したミノス王朝に代わって台頭したミケーネ王国とミノアの社会変遷を彷彿させる。

今から2000年前頃の壊滅的な南海トラフ地震・津波がもたらした被害は本州内陸や日本海側の山陰地域と九州や四国の太平洋沿岸地域では全く異なっていた。特に、津波災害は地域特有の地理地形に左右されるからである。近年の日本列島の複数の遺跡調査によれば、紀元後の数世紀、瀬戸内海周辺の古代日本では小規模な「高地性集落」が出現していた。沿岸平野部を避けた理由は津波や海からの侵略に対する防御が目的であったからだろう。

魏志倭人伝によれば、3世紀半ばに狗奴王国が邪馬台国と戦っていた。また、奴国と名付けられる国が2か所に存在していたと記述している。この記述は誤りであるとする説もあるがそれは不自然である。紀元直後に奴国王国の勢力圏が九州広域に広がっていたとすれば、未曾有の地震と津波の発生による社会混乱と争いの結果、奴国王国は分裂して分国化したと考えられるからである。このような社会の再編成は未曾有の大地震と津波の発生後に社会混乱が広がり続けたエーゲ海群島社会ミノアを彷彿させる。当時、東地中海沿岸にはミケーネ王国に侵略されたミノス王朝の残存勢力を含むミノアからの流民・移民からなる社会が形成されていたからである。

邪馬台国が台頭した3世紀初期の古代中国では統一政権の後漢が分裂して覇権争いが広がっていた。魏は魏晋南北朝時代とよばれるその政権分裂時代の紀元220年に建国されたが、その45年後の265年、魏の国名は晋になる。魏志倭人伝が記述されている「三国志」は魏、呉、蜀の三国による政権分裂の争覇史で、晋の史家であった陳寿が280年頃に編集した史書である。魏志倭人伝は3世紀末頃の日本社会を知る貴重な文書であるが、倭国の名、旅路の方向や距離についての誤認、また、現地見聞を行わずに綴ったような箇所もある。当時の古代日本社会には音節文字がなかったため、魏志倭人伝の著者は通訳の話し言葉を聞いて数多い地名を漢字で表記していたことも考えられる。

現在、邪馬台国について歴史論争が続いているが、その所在地についてはいわゆる「九州説」と「畿内説」がある。考古学者白石太一郎等の考古学説によれば、邪馬台国は紀元後1～2世紀の「鉄の時代の到来」に伴う鉄資源争いの中で再編成された倭国連合である。さらに、その所在地は古墳や遺跡出土資料の出現期と三角縁神獣鏡の編年研究によって、ほぼ、「畿内説」で決着したとし、古代日本史における次の課題は邪馬台国に続く「ヤマト政権」の成立過程であるとしている。しかし鉄の時代がすでに到来していた紀元前後に日本列島で発生した未曾有の南海トラフ地震と津波、それに続く社会混乱、争いや流民・移民がもたらした社会変遷については不問である。

邪馬台国と暗黒時代について

邪馬台国が台頭した背景には、多くの古代史研究者が考えているように、紀元後1～2世紀に倭国間で鉄資源の入手支配権争いがあったことは間違いない。確かに、強靱な鉄の武器や工

具は石器や青銅器に勝るため、鉄武器は覇権をめぐる戦争には欠かせないものであった。しかし1～2世紀の古代日本社会では史上最大規模の南海トラフ地震・津波が発生後に広がった食住資源の確保をめぐる社会混乱があった。邪馬台国の所在地を明らかにするためには、この自然の大異変に起因した争い、また、戦禍から逃れる流民や移民についての史実も明らかにされるべきだろう。

魏志倭人伝の原文（現代語翻訳）の中に邪馬台国は南海トラフ地震・津波の発生後に拠点を移していたことを暗に示す記述がある。それは、「その国は、元々は、また（狗奴国と同じように）男子を王と為していた。居住して七、八十年後、倭国は乱れ互いに攻撃しあって年を経た」、という記述である。遺跡調査が不可欠であるが、この「社会は・・・居住して・・・年を経た」という記述は多くの倭国が南海トラフ地震と津波で被災したが、邪馬台国が被災地に進出して社会混乱を収めていたことを示唆している。古代ギリシャでもテラ島のカルデラ噴火、巨大地震と津波の発生後に社会混乱が広がっていたが、ギリシャ本土のペロポネス半島内陸にあった都市群社会の盟主ミケーネ王国が被災地のクレタ島やエーゲ海沿岸社会に進入して社会混乱を収めていた。

3世紀末に編纂された魏志倭人伝は「昔は百余国あり、漢の時、朝見する者がいた。今、交流が可能な国は三十国である」と記述している。未曾有の南海トラフ地震・津波とその後の倭国間の長期にわたる戦争で多くの倭国が崩壊、衰退、あるいは合併していたのだ。また、247年の邪馬台国から魏への詔書によれば、当時、邪馬台国は狗奴国と戦争状態にあった。しかし邪馬台国と狗奴国との戦いの結末は明らかでない。古代文献学者の水野裕によれば、狗奴王国は邪馬台国との争いで政治勢力と王権を失った奴国の残存勢力が九州内陸に樹立した分国であった。その後の4世紀の時代、中国や朝鮮半島の古代社会でも熾烈な戦争が広がっていたこともあり、後世に書かれた神話以外には闇に包まれていた当時の古代日本社会を知る史実の記録はない。邪馬台国と狗奴国との戦争の実態が不明であることは「謎の4世紀」と呼ばれるその時代に社会の再編成が続いていたからであろう。当時、再び、巨大地震や津波が発生して内乱が広がっていたことも考えられる。

古代ギリシャにおいてもミケーネ王国が崩壊した紀元前12世紀後半以降に「ギリシャの暗黒時代」（亜ミケーネ時代）と呼ばれる時代が4百年前後にわたって続いていた。この闇に包まれていた時代、古代ギリシャ社会では社会混乱と争いが広がっていたため、当時の社会についての文書記録が存在しない。「ギリシャの暗黒時代」が始まる前、ミケーネ王国は紀元前12世紀にエーゲ海、東地中海と黒海のアナトリア半島沿岸地域において長期化していた「トロイア戦争」によって弱体化し始めていた。やがて、鉄器を持つドーリア民族（部族）の侵入や「海の民」との争いがあり、王国は崩壊した。災害考古学研究で知られる米国の地質学者エイモス・ノアによれば、「トロイア戦争」はアナトリア半島北部の断層地帯で集中的に発生した大地震後の社会混乱によるものであった。ホメロスによるヨーロッパ最古の叙事詩「イリアス」や「オデュッセイア」はこの「トロイア戦争」時代の古代ギリシャ社会の社会混乱と戦争の史実に神話を織り交ぜて描いたものである。

中国吉林省にある5世紀に作成されたことが確認された「好太王碑」によれば、391年に倭国政権の大軍が中国東北部に存在した朝鮮王国の高句麗に出兵していた。しかし倭国群は十数年後に敗北した。この倭国政権による戦争については8世紀初期に編纂された「古事記」と「日本書紀」（「記紀」）も記述している。しかし「記紀」には邪馬台国の名は見当たらない。その後、日本列島では争いが収まり始め、「ヤマト王権」（大和朝廷）が畿内（奈良）を拠に日本列島広域で倭国を統合し始める。明らかに史実を装った神話と史実が混在する「記紀」には邪馬台国や卑弥呼の名の記述はない。しかし8世紀に編纂された「万葉集」には卑弥呼の発音名に似た「日の御子」という名の記述がある。後の「ヤマト王権」国は邪馬台国の別名なの

であろうか。それとも、巨大地震と津波の発生後に合併した邪馬台国と狗奴国が樹立した王権国であったのだろうか。

現時点では、邪馬台国についての知識は主に中国の文献の記述に基づいたものだ。その記述には、通訳に依存していたためだろう、不明瞭な記述も多い。特に、その都の所在地については今でも異説が多い。しかし当時の社会再編成の激動、さらに、邪馬台国は倭国連合社会の総称名であると解釈できれば、連合盟主国の邪馬台国の都の所在地も、一定地にとどまらず、遷都していたことも考えられる。

古代日本の話し言葉、文字、神話について

紀元前数世紀前頃までの古代日本では意思伝達は縄と文様によるものであった。ミノアの「フェストスの円盤」に刻まれていたような線文字・音節文字は存在しないが、この縄と文様による意思伝達は後世のインカ南米社会でも見られるものだ。紀元前後になると、社会の組織化が進み、中国との外交や交易が広がった。その結果、より正確な交渉や交易の記録が不可欠になり、一部の倭国では中国の漢字の使用が広がり始めた。現時点では古代日本社会における漢字の使用を示す日本最古の遺跡資料は島根県松江で出土した紀元前後の「子」という漢字が書かれた硯であるようだ。日本固有の文字のない時代が長期間続いたが、9世紀初頭になって初めて漢字という表意文字を借字した日本固有の音節文字（音素文字）である仮名文字が普及し始めてくる。

魏志倭人伝の中に次のような記述がある：「応対には、噫（あい／はい）と言う。わかりました、という意味のようである」。当時の日本社会では書き言葉は漢字であったが、話し言葉は倭国独自のものであった。また、言語学者の森博達によれば、魏志倭人伝に記述された日本列島の地名や人物名の発音は母音で終わる。これらのことから明らかなことは、3世紀の古代日本社会では漢言語と異なる文法と音韻からなる日本固有の話し言葉が存在していたことだ。

「万葉集」は8世紀末から9世紀初頭に編纂された歌集であるが、万葉仮名という文字で書かれている。「万葉集」は見た目には漢文のようであるが、個々の文字が意味を持つ表意文字で書かれた漢文とは異なるものである。書かれた文字を発音して、音声化して、話し言葉に転換することによってその歌の意味が理解されるからだ。万葉仮名文字は、後世、漢字を草体化した50音からなる現在の仮名文字となっていく。平仮名や片仮名は漢字と違って表意文字ではなく、アルファベット文字に似た音節文字、より正確には音素文字である。現在の日本語文は表意文字と音素文字を組み合わせたものである。

「記紀」に書かれた古代日本の神話の中にイザナミという日本列島を産み出したとされる女神が登場する。「古事記」や「日本書紀」の記述には相違点も多いが、共に、天照大御神（天照大神）はそのイザナミの娘であり、太陽神でもあると記述している。イザナミは天照大御神の弟スサノオに日本列島の海原を支配するように命じた。しかしスサノオがその命に従わなかったため、イザナミに追放され、太陽神である姉の天照大御神の支配する高天原に向かう。しかし天照大御神は残忍で暴力を振るう弟のスサノオを恐れて天岩戸（洞窟）に籠った。その結果、世の中から光が失われ、世界は闇に包まれた。この神話は地震・津波や戦乱がもたらした古代日本の史実を反映している。秩序を失って荒れ狂う海原が高天原の社会に禍を広げ、世の中を闇にしたからである。その後、多くの神々が請願と努力を重ね、天照大御神が天岩戸から姿を現すと、人の世界に、再び、光が戻り始めた。

「記紀」に登場する天照大御神はこの世に闇と光をもたらす女神であると同時に太陽神である。この天照大御神とスサノオをめぐる神話は古代ギリシャ神話と共通点がある。ギリシャ神話では、アテナはゼウスの娘、都市国家アテネを生き育てた女神であったが、アテネの所有権を巡って弟の水の神ポセイドンと神々が裁く法廷で争った。判決で敗北したポセイドンは怒り、津波をおこしてアテネを襲う。一方、「記紀」に登場するスサノオは、水の神ポセイドンと同様、イザナミの命に背き、海原を乱した。そのため、高天原にも災いをもたらす。この酷似した古代ギリシャと古代日本の建国についての神話は独自に生まれたものだろうか。

古代アテネのギリシャ神話は紀元前に広がった神話である。一方、「記紀」は紀元8世紀に編纂された。近年、「記紀」の著者たちがアテネの神話についての知識を持っていた可能性を示す遺跡資料が出土している。1974年に発見された秦の始皇帝陵の兵馬俑坑で出土した兵士たちの彫刻像は古代ギリシャの彫刻技法に酷似している。この事実は2016年のBBCのプログラムで秦始皇帝陵博物院の李秀珍も指摘している。また、秦の始皇帝陵のある西安で出土した遺骨から西ユーラシア人のDNAが検出された。その年代は今から2千2百年前頃のものであった。このように、当時の古代ギリシャと古代中国の間で知識の交流があったことは否定できない。

紀元前326年、秦の始皇帝が争いが続いていた古代中国社会を統一した時期から数えて一世紀前、古代ギリシャ（マケドニア）のアレキサンダー大王が率いる連合軍が古代ペルシャ、古代インド（パンジャム）、さらに中央アジアに侵入していた。およそその3百年後、古代中国が秦から漢の時代に推移した紀元前後になると、東西文明社会の間で交易と知識の交流が深まった。サマルカンドを経由する交易ルートもできた。その交流ルートは後にシルクロードと名付けられた。

現在、邪馬台国をはじめ、卑弥呼についての論争は、主に、古代中国で編纂された「三国志」の魏志倭人伝や「後漢書」の東夷伝の記述の解釈に基づくものである。一方、日本で編纂された「記紀」では天照御大神が統一国としての古代日本社会を導いた神であるが、卑弥呼についての記述はない。「記紀」に卑弥呼の名や記述がない理由は魏志倭人伝や東夷伝の記述が当時の日本社会が魏という外国の属国を喚起させたためであろう。さらに、「記紀」の編纂者たちがギリシャの都市国家アテネを建国した女神アテナの神話についての知識があったとすれば、天照御大神は邪馬台国の女王卑弥呼を女神アテナと一体化させた神である。なぜなら、共に、未曾有の地震と津波の発生で社会混乱、流民・移民の増大や戦争が広がっていた古代社会の闇に光をもたらしたからである。

史実に基づいた真の神話は、神話論で名高いジョセフ・キャンベルの言葉にあるように、畏敬心を生み、宇宙の謎、社会の秩序、人生の道標を語る。今後、遺跡や出土資料について、新しい技術や異分野の専門知識を応用した学際研究が進み広がれば、邪馬台国だけでなく、古代日本の社会変遷についての理解もいっそう深まるだろう。

参考文献

白石太一郎、考古学から見た邪馬台国と初期ヤマト政権、「如水会会報、別冊」、2020年3月、Vol. 11。

田口一宏、弥生中期を終わらせた巨大地震、<http://yasugawa-iseki.yayoiken.jp/49taguchi6.html>、

Amos Nur with Dawn Burgess, Apocalypse-Earthquakes and the Wrath of God, Princeton University press, 2008.

中邑徹、地震とミノア文明、インタープレイブックス（電子書籍）出版、2020。

藤原治、谷川晃一郎、南海トラフ沿岸の古堆積物の研究：その成果と課題、「地質学雑誌」、第123巻、第10号、831-842ページ、2017年、10月。

森浩一、倭人伝を読み直す、ちくま新書、2010。

森博達、古代の音韻と日本書紀の成立、大修館書店、1991年。

岡村眞、松岡裕美、津波堆積物からわかる南海地震の繰り返し、「科学」、Feb. 2, 2012, Vol. 82, No. 2.

安本美典、日本民族の誕生（推理・邪馬台国と日本神話の謎）、勉誠出版、2013年。

吉田和彦、象形文字ウリイ語の解読の歴史と現状、ユーラシア古語文献の文献学的研究ニューズレター、No. 6, 2004。